

またしても壁が作られ 私たちが対立させられる前に
「僕と一緒に闘ってくれる人はいないのか」 — 「血に汚れた我が手」より

『ただの黒人であることの重み』は、人種主義と差別に抗する詩人の叫びである。「これは、その熱気で私たちが叩き起こし、自分たちも恐らくは沈黙の傍観者になってしまっているという可能性に目を開かせる作品である。」 — バサント・カナビラン、インド・ハイデラバード市

ニール・ホールの激しい詩は、私たちに自分自身の心の奥底に秘められた偏見に向き合うよう求め、彼の叫びは、アメリカだけでなく世界中の不正義を深く見つめるよう迫ります。ヘイトスピーチや排外主義があちこちで噴出している今の日本だからこそ、彼の言葉は、私たちの良心の核の部分揺さぶり、皆の意識の中に広がっていくべきなのです。

多くの日本人は、日本には差別はない、と考えて、あるいは、そう思いたがっています。そういう私たちでも、抑圧される側にいる者としての実体験に裏打ちされたニールの声を受け、自らを利する差別や愛国的排他主義に目を向け、仲間であるべき人たちへの迫害に気づくことを余儀なくされるでしょう。

私たちは、ニールの詩を警鐘として聞かなければなりません。そして、自分たちの特権を考え直す必要があります。どんな特権をどうやって手に入れ維持しているのかを。だからこそ、すべての人の尊厳と平等のために立ち上がって闘う責任があるのだと。

世界中で抑圧されている人たちは、身勝手な社会経済的利益のために、レッテルを貼られ、暴力的・非人道的に収奪され虐げられています。彼の詩はそれを雄弁に物語っています。

ニール・ホールは、人種主義と差別の犠牲になっているだけでなく、それをなくすためにしたたかに闘っているのです。日本のみなさんにも、この詩集『ただの黒人であることの重み』を読むことで、彼の訴えを聞き、行動を起こしてもらいたいと思います。

注文はこちらまで。 <http://www.sairyusha.co.jp/bd/isbn978-4-7791-2384-9.html>